

グラウンデッド・セオリー・アプローチによる エコ地蔵盆の導入過程に関する研究

今田 千草

キーワード：環境配慮行動，エコ地蔵盆，環境市民，グラウンデッド・セオリー・アプローチ

1. 研究の背景と目的

環境配慮行動における選択肢の中で、個人行動には合理的な意思決定過程により行動が選択されるが、集団行動では情動的な要因の影響が大きくなるとされる（広瀬，1995）。地域社会において、環境配慮行動を導入する活動を広く普及させるためには、地域社会における行動決定要因を解明する必要があり、実際の具体的な事例の分析を通じた検討を蓄積していくことが必要である。本研究は、特定非営利活動法人「環境市民」のエコ地蔵盆プロジェクトを研究対象とし、町内主体のエコ地蔵盆の現状の記述と、エコ地蔵盆の導入を可能にした要因を解明することを目的とした。

2. 研究方法

本研究は、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、GTA）に基づき、質問票調査、観察調査、及び面接調査結果に対する分析を行った。GTAは、データに密着した分析から独自の理論を生成することを目的とした質的研究手法であり、理論生成という目的を明示しているだけでなく、そのための調査・分析の手順を体系化したものである。GTAの手順をモデル化したものを図1に示す。

3. 調査・分析の概要

本研究では、2009年にチラシの配布や新聞等で広報活動を行ったエコ地蔵盆の手引き書『やってみよう！エコ地蔵盆』に対して、冊子請求のあった方に対する質問票調査、京都市内のエコ地蔵盆実施町内の観察調査を行った。本調査により確認できた各町内のエコ地蔵盆のそれぞれの取組の特徴などを紹介し、さらに、エコ地蔵盆の提案者に対する面接調査から得られたデータを用いて分析を行った。

4. 結論

本研究では、以下の2つの仮説（GT1, GT2）が生成された。本結果は、詳細な面接調査に基づき得られた科学的検証に基づくものであり、今後のエコ地蔵盆の活動展開および発展において有益な情報となりうる。また、地蔵盆を通じた環境配慮行動の普及に大きく貢献するものと期待される。

GT1：当該年度のエコ地蔵盆の導入には、7月末までに町内会役員に情報を提供する必要がある。ただし、町内会において役員会組織は、1～2年の周期で人員が入れ替わるため、他年度にわたり戦略的な情報提供をすれば、エコ地蔵盆の実施件数の経年的な増加が見込まれる。

GT2：エコ地蔵盆の導入において、他町内の事例は有用な情報となる。

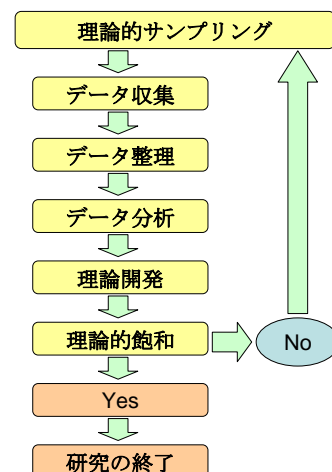


図1 GTAの理論構築過程のモデル

参考文献：広瀬幸雄（1995）『環境と消費の社会心理学—共益と私益のジレンマ』名古屋大学出版